

第2外国語としての中国語の授業モデル再考察¹

郭 春 貴

(受付 2008年10月30日)

0.

「日本の大学の2外中国語教育」(以下「2外中国語教育」と略す)は日本における中国語教育において大きな位置を占めている。第2外国語全体を見ても履修生は90年代から常にトップを走っている。2000年以後は大学生人口が減ったにもかかわらず、受講生は毎年15万人以上で²、中国語学習者の大半を占めている。しかし、残念ながら、2外中国語教育に関する研究はまだ少ない³。授業モデルについての研究もやっと近年のことである。しかも、史有為(2008)も荒見泰史(2008)も2外中国語のモデルではなくて、中国語主専攻の授業モデルについて論じたものである。

授業モデルは教学方法とは異なり、具体的な細かい教え方ではなく、1コマの授業デザインのことである。本論文は郭春貴(2008)の提案した「会話+語法語彙+文化」という2外中国語授業モデルを検討して、日本の大学の2外中国語の授業の性質と学生のニーズに合っているかどうか、また、実際にそのモデルを教室で行うに当たって、どのような問題点があるかについて論じたい。

1. 2外中国語の授業モデルについて考える前に

授業モデルは一般的に授業における教学の基本形式を指す。広い意味では、カリキュラムの編成、教材の選択、教学計画などを含むモデルも考えられるが⁴、本論で述べる2外中国語の教学モデルは「1コマの授業のデザイン」である。

-
- 1 本論文は郭 2008「日本の大学二外汉语课程的教学模式探讨」『中国語教育』第6号に基づいて、多くの先生の貴重なご意見を取り入れて、再考察したものである。
 - 2 山口雪江(2004)及び広島修道大学、広島大学2000年～2007年の資料によると、約40%の新生が中国語を履修した。文科省のサイト <http://www.mext.go.jp> によると、2006年の大学生数は603054人、40%で計算したら、約15万人になる。
 - 3 日本中国語学会の学会誌『中国語学』の2000年～2008年号には中国語教育に関する論文はゼロで、日本中国語教育学会の学会誌『中国語教育』は創刊号から8号までは中国語教育方法などに関する論文はあったが、2外中国語教育の問題に関する論文はゼロである。
 - 4 馬箭飛(2004)「汉语教学的模式化研究初论」

日本における 2 外中国語の授業モデルについて論じる前に、2 外中国語教育の目的、目標、対象、環境などについて考えなければならないだろう。

1.1 2 外中国語教育の目的

一体、2 外中国語教育の目的は何だろうか。筆者がランダムで 40 の大学の 2 外中国語履修サイトを調べたところでは、60% が「中国語の基礎知識を学ぶ」で、40% が「中国語の学習を通して中国文化を理解する」と書いてある。つまり、ほとんどの大学の 2 外中国語教育は専門的に中国語を学ぶのではなく、あくまでも、教養教育（大学によっては一般教育とも言う）の外国語教育の一部であり、目的も「中国語の基礎知識を学ぶ」か「中国語の学習を通して中国文化を理解する」となっている。

1.2 2 外中国語教育の目標

40 の大学のサイトの調査では、多くの大学は「中国語のローマ字表音法（ピンイン）を習得する、日常会話ができる語学力をマスターする、基礎構文を習得する」となっており、これは具体的とは言えない⁵。また、「中国語検定準 4 級か 4 級に合格する」という目標を挙げた大学もある⁶。中国語検定試験は 1 種の資格試験であり、検定協会の掲げているレベル自体が、「大学で 1 年学習程度のレベル」（4 級）とあり、具体的な目標ではないと思われる。目標は達成できるような具体的なものではないのではないのか。すなわち、中国語の発音はどの程度まで教えるべきか。どのぐらいの単語を教えるべきか、どのぐらいの文法ポイントを教えるべきか、というような、より具体的なものであるべきなのではないか。

1.3 2 外中国語教育の対象

2 外中国語教育の対象は言うまでもなく、日本の大学に在学し、専攻が中国語ではない学生である。これらの学生は週 1 回から 2 回中国語の授業がある。1 クラスの受講生数は多く、平均約 40 人である⁷。語学授業として適当な人数とは言えない。

また、近年、学力低下の問題によって、学生のレベルは大学によってかなり異なり、同じ大学内でもずいぶん異なる。そのため、中国語クラスの学生の学習能力もまちまちで、教えるににくいこともある。一方、最近の学生は英語以外の新しい外国語を学習するにあたって、文法よりも会話を望んでいる⁸。2 外中国語教育は学生のこのニーズを考えなければならないと

5 中央大学、立命館大学、東北大学、鹿児島大学など。

6 松山大学、愛媛大学、甲南大学、広島修道大学など。

7 「日本の中国語教育——その現状と課題・2002」の P.86

8 鄭麗芸 1997 「日本大学漢語教学一瞥」『世界漢語教学』第 1 期、張鉄欧 2007 「中国語教育初級段階における課題と教育法」（2007 第 5 回中国語教育学会全国大会発表論文）

思われる。

1.4 2外中国語教育の環境

2外中国語教育の環境は決していいとは言えない。日本の総合大学においては全般的に語学科目より専門科目、教学より研究のほうが重視され、第2外国語科目が削減される傾向が強い。これは選択必修から完全に自由選択にする大学が多いということである⁹。つまり、2外中国語教育は大学において、他の第2外国語教育と同じく苦しい立場に追い込まれている。

もともと選択必修科目としても、1年間で週2回の授業にすぎない。年間で前期後期各30コマだが、前後期のそれぞれ1回目のコース説明と最終回の試験を差し引くと、残りは全部で56回の84時間（1コマ90分）だけである。中には週1回、年間28コマ、42時間授業の大学もある。そのような短い時間で、どの程度中国語を教えるか考えなければならない。

大学が2外中国語教育を重視しない状況では、専任教師の採用は全く期待できない。調査によると、日本の大学の中国語教員は非常勤が64.2%で、専任教員は僅か35.8%である¹⁰。しかし、非常勤は専任と異なり、本務校の仕事が忙しいか、生活で忙しいかで、1つの大学での授業に全力投球できず、専任教師との協力連携もできないことが多いので、授業に統一性が欠けることも避けられない。

このような環境の中で、2外中国語教育はどうすればいいのだろうか。

2. 2外中国語の授業モデルにおける目的及び目標

中国語は外国語としての教学研究の歴史はまだ浅いが、中国国内では経済発展の影響により、徐々に研究も進んできた。50年代、60年代は構造言語理論の影響で、文や文章の構造などの分析と研究が中心であったが、70年代、80年代は構造、意味論、機能の言語理論の影響で、語彙の分析や文の誤用などの研究に変わった。そして、90年代に入ると、欧米の外国語教育の影響を受けて、構造言語学と、コミュニケーションアプローチ、文化の3要素が取り入れられるようになった¹¹。

残念ながら、日本における中国語教育ではこのような教育理論はまだ重視されておらず、専門にしても、2外の中国語にしても、新しい教学の研究と実践はまだ少ない¹²。しかし、

9 朝日新聞 2008/05/26

10 「日本の中国語教育——その現状と課題・2002」のP.88。調査した20校の2外中国語の専任と非常勤の比率は72名対129名で、専任は35.8%、非常勤は64.2%。

11 李泉（2006）、崔永華（1999）、馬箭飛（2004）

12 この10年間、日本における中国語教育に関する論文は、中国語学会の学会誌「中国語学」はゼロで、中国語教育学会の学会誌「中国語教育」の創刊号は5本の内3本、第2号は9本の内4本、第3号

2 外中国語の学習者が毎年15万人以上という数字は無視できるはずもなく、文科省にしても、大学側にしても、学生に勉強させる以上、2 外中国語教育をもっと重視しなければならないのではないか。また、中国語研究者も、中国語教育者もほぼ全員が2 外中国語教育に携わっているであろう故、双方で2 外中国語教育の研究と改善をしなければならないのではないか。

いままで2 外中国語教育については、個々の教学方法の研究はあるが、全般的な2 外中国語の授業モデルについての研究はまだ少ない¹³。しかし、教学の目的と目標を達成するには、個々の教学方法ではなく、全般的な授業モデルも必要である。そしてモデルは目的と目標に基づいて作らなければならない。

以下に本論文が提案したい2 外中国語の授業モデルについて論じる。

2.1 2 外中国語教育の目的

日本の大学はいつ、何のために2 外中国語教育を設けたのだろうか。大谷泰照（1997）によると、戦後新制大学では英語以外の外国語教育は第2 外国語（ほとんどドイツ語とフランス語）として、教養科目に属して行われていた。昭和25年当時の大学基準協会の大学基準によって「学部・学科にかかわらず2つ以上の外国語についてそれぞれ8単位以上の授業を必ず用意しなければならない」と定められた。当時は「外国語は主として原書講読に必要な専門科目の補助、専門科目の基礎」と位置付けられた¹⁴。

ところが、80年代の教養単位縮小に伴って、大学での外国語教育は1カ国語でもよくなり、第2 外国語の履修は徐々に必修から外された。1991年の大綱化によって、各大学のカリキュラム編成の自由度が大幅に拡大され、「2つ以上の外国語についてそれぞれ8単位以上の授業を必ず用意しなければならない」という法的枠組みが撤廃された。第2 外国語教育は必修から自由選択へと変わり、あるいは単位が減少された。また、「外国語は主として原書講読に必要な専門科目の補助、専門科目の基礎」という目的も「コミュニケーション能力養成」に変わった¹⁵。

しかし、週2回程度、しかも大人数クラスの第2 外国語教育はまだ教養科目に属しており、教養の目的が失われていないと思われる。いわば「教養」と「コミュニケーション能力養成」の2つの目的が含まれていることになる。

大学の2 外中国語教育も他の第2 外国語教育の目的と同じく、「コミュニケーション能力養

は10本の内6本、第4号は9本の内1本、第5号は6本の内2本、第6号は9本の内3本が中国語教育に関するものである。

13 同注12

14 田中慎也「大学<外国語教育>と<大学外国語>教育」『産研通信 No 56』2003-3-31 P.23-25 桜美林大学産業研究所

15 同注14

成と教養」という2つの目的がある訳だが、週2回程度、しかも人数が多いクラスで、どのように「コミュニケーション能力養成」をするか教師側は皆悩んでいるのではないか。本論は1.3、1.4に述べた2外中国語の教育環境と、学生のニーズ、大学教育の目的などを考え、「中国語の学習を通して、中国の文化を理解する」を目的としたい。

2.2 2外中国語の目標

教育の目的と異なり、目標は達成したい具体的なことを指す。2外中国語は「教養とコミュニケーション能力養成」という2面性の性格を持つので、具体的な目標を立てにくいことも理解できる。そのため、1.2で述べたように、多くの大学で2外中国語の具体的な目標が挙げられていないことも理解できる。しかしながら、そのままでは2外中国語教育は少しも変わらない、依然として、曖昧な目標で行き当たりばったりの教育になりかねない。本論は1に述べた教学環境などを検討し、1年間の2外中国語の目標について次のものを提案したい。

2.2.1 大目標：学生に中国語と中国文化に興味を持たせる

わずか週2回、年間56コマ84時間の授業で「教養とコミュニケーション能力養成」という目的を達成するための一番大切な目標は、授業を通して学生に中国語と中国文化に興味を持たせることだと思われる。興味があれば、語学に限らず、自分で中国に関することを勉強することもできる。しかも、興味があれば、1年間の課程が終わっても、継続して勉強する可能性が高いと思われる。

問題はこの目標も曖昧で、どうやって授業の後に、学生の興味があるかどうかを判断するかである。確かに、興味という目標を判断するのは難しいかもしれない。けれども、クラスの雰囲気、学生の勉強の意欲などで多少なりとも判断できるのではないか。興味があれば、学生は中国語と中国文化が好きになり、当然楽しく一生懸命に勉強するに違いない。そうなれば2外中国語の最大目標を達成したと言えるのではないか。

2.2.2 小目標1：中国語の発音基礎をマスターする

すべての語学は発音が基礎であることは言うまでもない。中国語を習う以上、まず発音の基礎をマスターしなければならない。特に声調とピンインを聞く、読む、書くことを学生に身につけさせなければならない。これができれば、学生はいつでも一人でも中国語を学習することができる。極端に言うと、1年間の2外中国語は発音だけ教え、学生がちゃんとマスターできたら、すべてがうまくいくとも考えられる。発音がうまくできないと、コミュニケーション能力の養成もできないはずである。

2.2.3 小目標2：300の簡単な日常会話をマスターする

「コミュニケーション能力養成」の目的を考えて、簡単な日常会話力を身につけなければならない。例えば自己紹介、日にち、時間、場所、買い物、電話などの言い方を覚えなければならない。そのためには、目標としてマスターすべき日常会話は1年間で300程度¹⁶がふさわしいと思われる。

2.2.4 小目標3：600程度の常用語彙をマスターする

語学の初級段階の目標として発音と日常会話の他に、基本常用単語もできる限り教えたい。1年間56コマの短い時間では、あまり欲張れないが、せめて、必要な常用単語を計画的に教える必要があるだろう。初級の段階では、「コミュニケーション能力」で大切なのは、文法より単語だとよく言われる。実際、文法が分からなくても、或いは文法が間違っている、単語の羅列だけでもコミュニケーションができるという状況がしばしばある。従って、2外中国語の小目標はせめて600程度常用単語を身につけさせたい。この600という数字は中国語教育学会の学力基準プロジェクト委員会編『中国語初級段階学習指導ガイドライン』（2007）に従ったものである。もちろん大学のレベルによって、多少は増減できるだろう。

2.2.5 小目標4：80程度の常用文法ポイントをマスターする

日常会話と単語の応用には、基本文法も必要であり、基本かつ常用の文法ポイントも教えるなければならない。中国語専門の授業ではないので、系統的に形態素、語、文、品詞などの中国語文法を教える必要はない。初級段階では、学生が応用できる簡単かつ必要な文法ポイントを教えれば十分である。1年間56コマを考えると、常用文法ポイントは80程度が適当ではないかと思う。これも大学のレベルによって、増減は可能だろう。

2.2.6 小目標5：中国文化を少しでも理解させる。

2外中国語教育は語学だけではなく、「教養」という目的もあるので、中国文化について簡単に紹介することも必要だと思われる。文化の紹介は教養としての教育だけではなく、語学に興味を持たせる役割もあるので、授業を通して、少しでも中国文化を理解させるのも、2外中国語教育の目標として必要であろう。

16 1回の授業で5個の日常会話文を覚えさせれば十分だと思われる。週2回、年間60回の授業で、全部で約300個になる。

3. 2外中国語の授業モデル

以上の教育環境，目的，目標を考慮して，劉珣（1997），李泉（1997）が提案した「構造＋機能＋文化」という3要素を組み合わせたモデルがある。しかし，両氏が提案したモデルは初級で構造，中級で会話，上級で文化を分けて行うモデルなので，日本の2外中国語教育には適用できない。日本の2外中国語は1年間で56コマしかない授業で「教養とコミュニケーション能力養成」という目的があるので，授業で同時に会話，文法，文化を教えなければ目標を達成できない。それゆえ，「コミュニケーション言語理論」と「構造言語理論」に基づいて，郭（2008）は「会話＋文法語彙＋文化」という3要素を組み合わせたモデルを提案した。本論では更に簡潔にした「会話＋文法＋文化」という名称のモデルを提案したい。

以下具体的に「会話＋文法＋文化」というモデルを紹介する。

3.1 会 話

外国語は実用性を重視する授業であり，授業の最大目標は学生にその外国語を身につけさせ，実際に応用できるようにさせ，コミュニケーション力を高めることである。2外中国語は1年間で56コマという短い時間では，高いコミュニケーション力を養うことはできないが，学生が少しでも簡単な日常会話を正確に話せるようになったら，中国語に対する興味も湧き，勉強の意欲も持ち続けると思われる。また，2外中国語の対象の学生はそのほとんどが会話を勉強したいという希望を持っており，そのニーズにも応えなければならない¹⁷。

このモデルの重点は会話にあり，1コマ90分の授業で30分の会話訓練をする。会話の内容は簡単かつ実用的で，短く面白いものでなければならない。二人の会話文は全体で4～6の会話文がベストである。勉強と復習をしやすくするために，会話文に含まれる文法ポイントはなるべく簡単で実用的なものを入れるべきである。

授業の基本方法は「たくさん聞き，たくさん読み，たくさん練習する」。30分間で，なるべく多く「聞く，話す」を練習する機会を学生に与えることが肝心である。

3.2 文 法

このモデルで文法は授業の中心である会話をサポートしなければならない。すなわち，文法は系統的な文法ではなく，会話文の中に含まれる簡単かつ実用的な文法である。これを30分以内で行い，文法ポイントの学習を通して，会話文以外の応用会話を身につけさせる。学

17 同注8

生のレベルによって、30分以内で3～4つ、或いは4～5つのポイントが適当だと思われる。

とにかく、このモデルの文法部分は文法の知識の伝達よりも、文法の学習を通して、会話の応用力を育てることがねらいである。文法の説明はなるべく簡単にして、新しい単語を用い、入れ替え練習などを通して、文の構造と単語を同時に学習させるのである。

3.3 文 化

2外中国語の目的である「中国語の学習を通して、中国の文化を理解する」を考えると、このモデルでは文化の部分が無視できない。授業の最後で簡単に文化を紹介する。この文化は普通の教養科目とは異なり、延々と詳しく話すことはない。あくまでも学生の興味を高めるための、語学授業の補充であるので、20分以内で簡単に文化を紹介する程度で十分である。内容は政治経済など硬い話ではなく、学生の関心が持てる軽くて多様なテーマが好ましい。例えば、中国料理、中国茶、中国のスポーツ、中国の教育、中国の若者文化など。1回の授業につき1つのテーマで、写真、実物、ビデオなどを学生に見せて、興味を持たせる。

3.4

このモデルは会話30分、文法30分、文化20分、計80分で、残りの10分は授業の前置きと最後のまとめに使う。もちろん、時間の調整は自由である。大切なのは、2外中国語の目的と目標を達成するために、1コマの授業の中に「会話」「文法」「文化」という3つの要素を取り入れるということである。

このモデルで3つに分けるもう一つの大切な狙いは、学生を授業の90分間退屈させず、教育効果を高めることである。

4. 「会話+文法+文化」というモデルの問題点

このモデルが2外中国語教育に適しているかどうかは実践の証明が必要だと思われる。筆者がこの2年間、一部のクラスでこのモデルを実施した結果、確かに効果があると確信した¹⁸。多くの学生が生き生きと楽しく中国語を勉強して、簡単な会話ができるようになった。1年間の授業が終わっても中国への短期留学を希望する学生も何人かいた。しかし、このモデルはまた以下の問題点が残っていることも否定できない。

18 筆者がこのモデルを実施した広島修道大学の3つのクラスは2006年と2007年の2年間の授業評価のアンケートで、5点満点で平均4.7点、広島大学の1クラスは4点満点で3.8点の評価をいただいた。

4.1 評価の問題

このモデルの中心は会話であるが、それに、文法と文化があり、それぞれの評価方法が難しい。文法は作文テストが考えられるが、文化の評価はどうすればいいか。会話力の評価はどうすればいいか。現実には40人以上のクラスで、1コマの90分のテスト時間内では、3つの内容でテストを行うのは難しい。

実際、筆者は「文化」の評価は割愛せざるを得なかった。もちろん、レポートを書かせる方法もあると思われる。会話力の試験は筆記試験の間に1人1人別室で2分間の簡単な会話テストを行うことができる。しかし、そのためには助監督が必要である。さもなければ、筆記と会話の試験は別々に行わなければならない。それでは教師の負担が重くなるかもしれない。

4.2 教師の問題

このモデルは「会話」「文法」「文化」という3つの内容に一定の繋がりがあり、またそれぞれ教え方を変えなければならない。90分の授業時間内に会話の訓練、文法ポイントの練習、文化の紹介を楽しく教えながら1つにまとめなければならないので、かなりの能力が要求される。また、3つの内容の準備と訓練が必要なので、教員の負担がかなり重くなるに違いない。このモデルを実行するに当たり、大学側の協力と管理がなければ、教師個人の自覚と努力が必要になる。

4.3 教材の問題

いかなる授業モデルもそれに適応する教材が必要である。いま日本ではこのモデルに適している教材はまだ少ないので¹⁹、これからはこのモデルに基づいて教材の編集が必要である。各大学のレベルに合わせて、相応しいテキストの出現を期待する。

5. ま と め

よい授業は目的、目標に相応しいモデルが欠かせない。筆者は長年にわたり日本の大学で2外中国語を教えてきたが、教育内容、教育の質、教員などの問題が少なくなく、解決を探りながら、少しずつ研究を始めた。本論文は2外中国語教育の質を高めるためのモデル研究である。もちろんこの「会話+文法+文化」というモデルは2外中国語教育に適する唯一の

19 筆者が調べた50冊の大学用のテキストはほとんど会話、文法ポイントだけで、文化の紹介がない。郭春貴・郭久美子編著「やさしく楽しい実用初級中国語」(白帝社)はこのモデルに基づいて作った教材である。

ものではなく、あくまでも 1 つの提案である。このモデルに関心を持ち、研究が盛んになることを望んでやまない。

また、2 外中国語の教員もぜひ授業の目的と目標を考え、このモデルを試行していただけたらと願っている。容易ではないはと思うが、学生のために、ぜひ挑戦してほしい。

一方、このようなモデルを実行するために、文科省、大学側のよりよい教育環境の提供も不可欠である。学生のニーズを考えて、2 外中国語教育をさらに重視し、予算を作り、非常勤ではなく、専任教師か契約講師の増員を望む。また、教員が研究と教育を両立できる環境を作り、教育目的と目標などの教育の質の管理をきちんとしなければならないと思われる。

参 考 文 献

1. 李泉主编 2006 『对外汉语课程, 大纲与教学模式研究』商务印书馆
2. 崔永华 2006 『对外汉语教学的教学研究』外语教学与研究出版社
3. Bruce Joyce 等著 荆建华等译 2002 『教学模式』中国轻工业出版社
4. 関口一郎編著 1993 『慶応湘南藤沢キャンパス・外国語教育への挑戦——新しい外国語教育を目指して』三修社
5. 田中慎也著 1994 『どこへ行く? 大学の外国語教育』三修社
6. 日本中国語学会中国語ソフトアカデミズム検討委員会編 2002 『日本の中国語教育—その現状と課題 2002—』日本中国語学会
7. 马箭飞 2000 「以“交际任务”为基础的汉语短期教学新模式」『世界汉语教学』第 4 期 P.87-93
8. 马箭飞 2004 「汉语教学的模式化研究初论」『语言教学与研究』第 1 期 P.17-22
9. 陆俭明 1998 「对外汉语教学中经常要思考的问题——为什么? 是什么? 怎么样?」『语言文字应用』第 4 期 P.2-9
10. 山口雪江 2004 「東京都内100大学(短期大学含む)における中国語教育カリキュラムの現状について」『華蓉論叢』第 3 号
11. 荒見泰史 2008 「明海大学の新中国語教育システムについて——明海模式 Meikai-model の誕生と教育効果」『応用言語学研究』No.10 明海大学大学院応用言語学研究科紀要 P.187-201
12. 史有為 2008 「教学法和教学模式的解析与重组——兼及日本汉语教学中的相关课题」『世界汉语教学』第 3 期 P.87-98
13. 田中慎也 2003 「大学“外国語教育”と“大学外国語”教育」『産業通信 No.56』(桜美林大学産業研究所) P.23-25
14. 田中陽子 2002 「日本における英語以外の外国語教育の現状の概観, ならびに EU の言語教育の理念と対策及び EU 加盟国の言語教育の状況の瞥見」『言語文化論究』16号 P.95-116
15. 大谷泰照 1997 「諸外国における外国語教育改善の方向」『小学校からの外国語教育』研究社 P.41-49
16. 郭春貴 2008 「日本の大学二外汉语课程的教学模式探讨」『中国語教育』第 6 号 P.19-33
17. 郭春貴 2005 「日本の大学汉语教育问题」『世界汉语教学』第 4 期 P.91-97
18. 郭春貴 2007 「大学における第 2 外国語の中国語教育の位置づけ」『広島修大論集』第 48 卷第 1 号 P.165-179

Summary

再论日本大学第2外语的汉语教学模式

郭 春 贵

日本大学第二外语的汉语教育可说是日本汉语教育的中心，每年学习人数几乎达十五万左右。可是面对这么多学习者，日本汉语学界对这方面的教学研究还刚起步。特别是对这方面的教学模式的探讨更是少之又少。本文以(郭春贵 2008)为基础，再次分析探讨更适合日本大学第2外语的汉语教学。

首先介绍日本大学第二外语的汉语教育的目的、目标、对象、环境等现状。然后提出教学模式对语言教学的重要性。为了提高教学效果，必须要有高效率的教学法，而教学法是服从于教学模式的。

为了拟定适合日本大学第2外语的汉语教学模式，首先得具体确定这种教学的目的与目标。为了适应新时代的要求，符合学生的要求，本文提出这种汉语教育的目的应该置于“通过学习汉语，了解中国文化”。目标则分为大目标与小目标。大目标在于通过学习汉语，提高学生的兴趣，小目标则分为4个：①掌握汉语的发音基础，②掌握常用会话300句，③掌握600个常用词汇，④简单了解一些中国文化。

为了达到以上的教学目的与目标，本文提出了“会话+语法+文化”三结合的教学模式。这三结合的教学模式具体如下：

1. 会话：为整节课的中心，占30分钟。以多讲多练为主，让学生多听多讲。会话内容不宜太长，最多一课6句左右。

2. 语法：第2外语汉语课，不是汉语专业课，不宜讲太多语法。30分钟的语法讲解应服从于会话，避免枯燥无味的讲解，应结合词汇的学习，采用替换练习方法来掌握语法知识。

3. 文化：文化课只是整节课的辅佐，目的在于提高学生的兴趣，不在于讲解文化知识。15分钟内应尽量利用DVD、图片等教具，简明扼要地介绍中国文化。

这“会话+语法+文化”三结合的教学语法，不是一个绝对的教学模式，这只不过是一个建议的模式。使用这个模式将面对如何评价，使用什么教材，师资训练等问题。笔者虽尝试采用这个模式进行过教学，也获得了一定的成果，但还只是个人的经验，究竟这个模式是不是适合于日本大学的第2外语的汉语教学，还有待更多的实践来证明。